

川の流に身を任せて

北川 明

(元岩手工事事務所長)

育ったところは熊本県の北部に位置し有明海に面した小さな田舎町です。九州は台風の常襲地帯です。あちこちで雨漏りする中、親父、兄と私の3人で必死に雨戸を一晩中抑えていたこともありましたが、雨戸が破られれば、屋根が吹き飛ばされてしまうからです。雨漏りするのは、家がぼろだという訳ではありません。風が強いと屋根に降った雨水が下からの吹き上げで瓦と瓦の間に逆流するため雨漏りとなってしまいます。子供ながらに台風の後の楽しみもありました。田舎町は金魚の養殖が盛んで、多くの生簀から溢れて逃げ出した金魚をあちこちの水路で捕まえることができましたのです。

夏は暑く、昼間の日差しが強烈で、夜はじっとしていても汗がべっとりとまとわりついてしまうほどです。楽しみはなんといっても水遊びです。有明海は干満差が激しく、昼間の時間帯に干潮となってしまうと沖のほうまで干潟が露出して泳ぎどころではありません。そうすると近くの川が格好の水遊び場となります。浦川という二級河川で、けしてきれいな川ではありません。夢中で遊んでいるといやおうなしに川の水を飲んでしまうこととなります。少々泥臭く水草のおいが混ざった水の味とにおいは、深く脳裏に刻み込まれていて今でも鮮烈に思い出すことができます。当然鮭ほどでないにしても、人も動物として故郷の川と結び付けられる本能的な何かを持っているのではないかとも思っています。

川での泳ぎといえば、高校の近くを流れていた一級河川菊池川で水難事故を起こしそうになったことが

ありました。深くはないもののそこそこ流れがあって、勢いよく飛び込んだところ両足のふくらはぎが攀ってしまったのです。両足は痛くて動かせず、浅いのに立つことは不可能でした。一瞬「溺れるのかな」との思いが脳裏をかすめましたが、気持ちを落ち着かせ流れに任せることにしました。両手だけで流される方向をコントロールし、ようやく手が届く浅瀬までたどりつくことができました。プールで何回も飛び込んでいてもこのようなことはなかったのに何故足が攀るほど力が入ってしまったのか不思議です。川の自然の流れや風景に気圧されて思わず必要以上の力が入ってしまったのか、または、足元が砂利で不安定なため、頭で描いたイメージ通りに飛び込もうとしたとき、ふくらはぎの筋肉にこれまでに経験のないほどの負荷がかかったか、あるいは、それら両方が作用したのかもしれません。あくまでも個人的な見解ですが、自然の川が持つ人の行動に影響を与える物理的な面はもちろんのことですが、つつい大胆な行動や体に思いもよらない負荷がかかる行動を取ってしまう心理的側面にも注意を払う必要があるような気がします。

仕事柄いくつもの特徴的な河川と係わりを持つことができました。最後の清流と言われていた四万十川ですが私が赴任したときには、生活排水等の影響もあるのか、川から羽化したカゲロウが橋梁の街灯に無数に群がり、交通障害になるような状況が見受けられました。今では下水道等の整備が進み、清流と呼ばれるに相応しい川になっているものと思われまます。驚いたのは落ち鮎の時期です。川の両岸が帯状に黒々としているので、よく見たら落ち鮎が河岸に沿って帯状に群がっていたのです。一回の投網でバケツ一杯の鮎が取れるほどで、自然の恵みの凄さ、ありがたさが実感されました。

天竜川は、中央アルプスと南アルプスに挟まれ、ほぼ

直線的に遠州灘に下り落ちる急流で両アルプスから発生する土砂量が多く、暴れ天竜として知られています。河口部が遠州灘に魚の口先みたいに突き出した地形となっています。天竜川によって運ばれた大量の土砂によって形成されたものです。最上流部に諏訪湖をかかえ、諏訪湖から出る水は、支川が合流するため徐々に下流に向かって清流化していくという通常とは異なった面があります。水生昆虫の佃煮が「ざぎむし」として珍重されています。

利根川は徳川幕府によって河道が銚子へ付け替えられ、東北の物資の舟運のため活用され江戸の人々の生活を支え、社会経済の発展に重要な役割を果たしました。現在では舟運のための役割は全くありませんが、今も大量の水資源を供給して首都圏の社会経済活動を支えています。戦後まもなく蛋白源不足を補ため中国から移入されるとされるハクレンが、普段霞ヶ浦に生息しているのですが、梅雨期になると産卵のため利根川の中流域(久喜市栗橋地点)まで遡上します。1m以上の巨体を空中高く跳ね上げ群れでジャンプする光景は圧巻です。YouTubeの動画で迫力満点のジャンプを見ることができます。群れでジャンプする行動が産卵とどう関係するのは解ってないそうです。

そして北上川です。心身ともどっぷり浸かったのが北上川でした。体ごと北上川に投げ出されたのは、四十四田ダム地点から盛岡市街地に向けスタートする北上川ゴムボート大会です。スタート直後から結構速い流れに気圧されて、本能的に身を守るろうとしたのか、無駄な力が体中入っていたのでしょうか。具体的な箇所はわすれましたが、流れが数十cm落ち込むところで無力にもゴムボートが転覆し、気がついたら体は水中に没していました。それと同時に強張っていた心が解けて、大げさでなく北上川に抱かれているような感覚を感じていました。その後のゴムボート下りは、無駄な力が抜け流れにうまく乗り、本当に楽しいものでした。高校生のときには川の流れに身を任せて難を逃れましたが、北上川では川の流れに身を任せることによって、川は心を解きほぐし自然体にしてくれるこ

とを実感として学ぶことができました。上流から下流に向かう必然的な流れに無理に抗ってもしかたなく、川と楽しく触れ合おうとすれば自ずと心が開かれ自然体になるのではないのでしょうか。私たちの生活を支える川の重要性については頭で学ぶことが必要ですが、一方では体で体験して心で感じる、いわゆる体で学ぶことも大事だと思っています。川で身近な自然を体験することで自分自身のことを客観的に見つめられ、自然体で人と向き合えることができるようになるのではないかと個人的には考えています。心を裸にするためには、川で様々な体験した後、体験前でもいかもしれませんが、川にどっぷり浸かって、しばらく流れに身を任せてみるのが効果的かもしれません。

追記：最近、雑草だらけの自宅の庭で四つ葉のクローバを見つけたことを契機に、クローバの群生を見るとついつい目がいくようになっていました。仕事の現場である千曲川の堤防にクローバが群生していたので、ふと見ると変わったクローバが目に入ってきました。葉の数が七枚もあったのです。Webで調べると、四つ葉はもちろんのこと五つ葉、六つ葉、七つ葉もあるということで、七つ葉の発生確率は、なんと2億5千万分の1と記されていました。どのように算定されたのか知る由もありませんが、四つ葉でさえなかなか見つけられないことから、めったにないことは想像に難くありません。こんなに確率の低い事象に遭遇することもあるのだと思うと嬉しくなってきました。川には思いもよらない発見や出会いがあるのかもしれませんが。気が向いたら近くの川に足を運んだらいかがでしょうか。

